

住田実践【第1学年 国語科】

～ ようすをそうぞうして おんどくげきをしよう ～



本実践の主張点

自分にとって意味のある知を創造するために

- I 育みたい見方・考え方の系統性を明確にして多様な見方・考え方から焦点化し、個に生かす単元を構想する。
- II 4観点で教師と子どもが共に指標をもち、自他の学びを自覚する場をもつ。

多様から焦点化し、個に生かす単元構想について

ここでは、子どもたちが「自分にとって意味のある知」に向かうための方策について提案された。「多様から焦点化する」とは、単元の入り口を自由に広く設定し、個やグループ、集団の主体性を高めておき、そこから質的転換点を捉えて指導することによって、見方・考え方の焦点化を図ろうというものである。そして、「個に生かす」とは、焦点化された見方・考え方を使得て自己選択・自己決定する場をもち、個に返す単元を構想することで、自分にとって意味のある知につながることであり、提案者は述べている。同じ場面や状況に直面したとしても感受の度合いは子ども一人一人によって異なるため、育まれる見方・考え方には多様性が生じてくる。そこで、単元の初期の段階では多様な見方・考え方を認めつつ、それらを拠り所としながら集団での問題解決を行っていく。そして、それらのよさを集団で吟味したり、自己選択・自己決定を繰り返したりしながら自分の学びに生かしていくことで、見方・考え方の質は高まり、自分にとって意味のある知を生み出すことにつながっていくということであろう。これを本時の問題解決に当てはめて考えてみると、「①単元導入時の多様な見方・考え方＝音読のレベルアップポイントとそれを解決するための方法」、「②焦点化された見方・考え方＝全体交流によって共通理解された、本単元で育みたい見方・考え方」、「③自分にとって意味のある知＝音読をレベルアップさせるための自分なりの工夫点」とであると解釈できる。ここで考えたいのは、②に向かう過程についてである。この②は、単元を構想するにあたって教師が想定した、育みたい見方・考え方に直接関わることであり、集団によって焦点化された限定的なものである。しかし、単元導入時もしくは初期の問題解決によって子どもの中に生じた見方・考え方には、それぞれの個性があり、思い入れがある。集団で吟味を行い、多様なものからよりよいものへと高めていく過程は重要であるが、個々のこだわりも大切にしたい。ここでの焦点化とは、子どもの意識を教師の意図の中に落とし込んでいくことではなく、自分とは異なる考えに触れ、刺激を受けることによって、より納得の深いものへと高めていくということだと考えるのはどうか。いずれにしても、このような収束と拡散を繰り返すことによって子どもは学びの意味を少しずつ実感し、内容理解を超えた、「自分にとって意味のある知」へと到達できるようになるのではないだろうか。

学びの自覚化を促すための手立てについて

本提案では、見方・考え方及び主体的もしくは共感・協同的な態度を育むための学び方について、子どもが積極的に自己評価を行っていくよさについて述べられている。この自己評価の結果については、個々の内面のみに収めるのではなく、教室に子どものものさしの常設掲示板を設け、集団で本時の学びを振り返ることができるよう工夫されていた。そうすることにより、自然と子ども同士での評価の場が生まれ、子どもたちが自他の学びを自覚することにつながるという考えからである。本時の終末には、子どもたちが教室後方の掲示板に自然と集まり、自己評価のためのシールを貼る場面が見られた。自分なりに学びの意味について考え、自覚化した場面であったといえる。

ここで考えたいのは、見方・考え方だけでなく、4観点全てにおいて教師と子どもが指標をもっておく、ということについてである。本年度、教科学習で大切にしている「自分にとって意味のある知」は、4観点全てを高めることでようやく到達できるものである。したがって、子どもがその教科や単元の学びに意味を感じ、内容理解の先にある自分なりの実感にたどり着くためには、やはり4観点全てを意識しながら授業を構想していくことが大切である。ただ、ものさしをどのような言葉で置くのかということについては今後も議論が必要である。子どもなりの表現に依りすぎたり、それらが多様かつ複雑すぎると、ものさしは各観点の高まりを見て取る指標ではなく、達成できたかどうかのドメイン的なチェックシートになる恐れがある。その本時で行うかどうかは別としても、学びを個や集団で振り返る機会をもつことは、個々の真の理解、深い理解を促すために大切なことである。今後も学習者自身による学びの評価の在り方について考えていくようにしたい。

成果と課題

- 収束と拡散を繰り返す学びの中で、子どもの学びは意味付けられ、自分にとって意味のある知が見出されやすい状況が生まれることが明らかになった。
- △ 子どものものさしについて、それらの内容と共有の仕方について、今後改めて考え、実践の中で検証していく必要がある。

The Futaka Spirit

(現教だより第15号)

1年 国語科

単元名 「ようすをそうぞうして おんどくげきをしよう」

指導者 住田 恵津子 先生

積み上げの見える子どものための学習環境、緻密に計算された美しい板書、丁寧な発問の数々……。子どもたちを授業に没頭させるための工夫があちこちに見られました。子どもたちへの優しさが感じられる柔らかな語り口調が印象的でした。

【子どもの活動】

1 音読劇の練習をし、レベルアップポイントとその方法を考える。
(前時)

2 レベルアップポイントから場面の様子を想像する。

(1) グループで交流する。

(2) 全体交流を行い、場面の様子を想像する。

4 自分が取り入れたいレベルアップポイントを劇の台本に貼り足す。

5 レベルアップポイントが見つかった理由について振り返る。



全体でレベルアップポイントを確認する



グループ交流を通してポイントを確認する



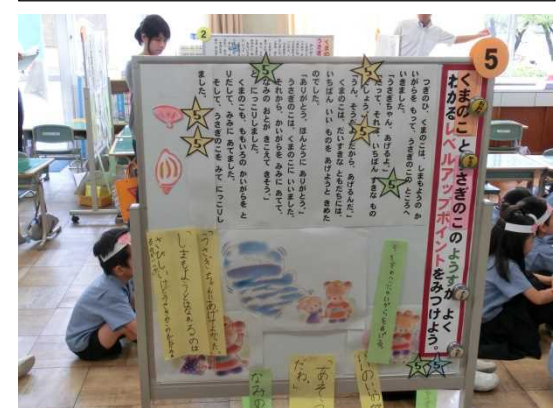
交流を繰り返しながら学びを深める



全体交流を行い、活動を振り返る



4 観点のものさしに従って自己評価を行う



子どもの学びを支援する学習環境の工夫

(文責 橘 慎二郎)

【住田先生コメント】

子どもが自ら見方・考え方にたどりつくためのしかけが足りなかった。教師がねらうところにいかに子どもが自然に目を向けられるか、もっと子どもの実態によりそって考えるべきであった。先生方からいただいたご意見やご指導のもとに、これからも共に学ぼうとする土壌を育みつつ、子どもたちが考えたくなるしかけや子どもの思考の道筋について具体的に探り、子どもたちが手応えを感じられるような学びにしていきたい。

